アレキサンドリアからの手紙 ⑦

（E-JUST : Egypt-Japan University of Science and Technology）

大阪大学名誉教授　　河　﨑　善一郎

8. 道半ばながら

私は、戦後間もない昭和24年（1949年）の生まれです。

小学校に入学したのが昭和30年4月、あの頃の日本は、神武景気、岩戸景気と続いて「もはや戦後ではない。」と経済白書には書きこまれ、右肩上がりの経済が続き、我が国は高度成長に向かってひた走り続けました。

ただ、私の生まれた大阪府南部の山間部は、恥ずかしながら私が小学校高学年となる頃まで、道路は舗装されていませんでした。それにゴミ回収の制度も未整備で、家庭ごみは平気で町内を流れる川に捨てられておりました。

「汚いものは、川が洗い流してくれる。」あの頃はそんな公共道徳が、田舎では当たり前にまかり通っておりました。

先年流行った「3丁目の夕日」は、昭和30年代に対しての我々団塊世代の感傷、センチメンタリズムをくすぐったものですが私の場合、田舎育ちという事もあって、東京・大阪の大都市に比べ、さらに10年も20年も古い時代というのが実態だったのかも知れません。

いきなりこんな書き出しで始めたのは、この5月おおよそ半年ぶりに訪問したエジプト・アレキサンドリアの現状が、50年前の私の子供の頃の故郷と比べてどうだろうと考えるからです。任期を終えて彼の地を去ってから、わずか半年ですから大きく変わっている筈もありません。現実のアレキサンドリアは、人口200万を超す大都会ですが、ゴミのポイ捨てはおろか、ちょっとした路地は相も変わらずゴミ置き場の体になっているのです。街中を走るトラムの線路は、ゴミ捨て場の風情すらある場所が多いのが実情です。それに道路は、舗装道路と地道が混在した状態で、轍の後も多くて、昭和30年代当時の日本に比して自動車が桁外れに多い以外は、あの頃の「私にとっての日本」そのものなのです。だから「はたして50年後のエジプト・アレキサンドリアの街は、今日の日本のようになるのだろうか？」と、ついつい思いは巡るのです。

長期滞在が終わったとは申せ、未だにE-JUSTをお手伝いしておりますが、エジプトの友人達は「第二次大戦後50年であの奇跡を起こした、日本人の誠実さ、ひた向きさを学びたいのだ！そしてこのエジプトも、日本のようになるのだ。」とおっしゃいますが、一方では気高いエジプト人気質もあって、議論してもなかなか譲ろうとしない頑固さもあります。そして「だけど・・・」という言い訳（excuse）がまず口をついて出るのです。だから、お手伝いも生半可ではうまくいかないというのが、現実なのです。

E-JUST（Egypt-Japan University of Science and Technology）に関わって、足掛け5年弱。アレキサンドリアにも、長期専門家として2年間は住みました。だからというつもりは毛頭ありませんが、エジプトの友人達の良さも悪さも、私なりに判ってきたつもりです。それゆえあの国をよくしたいという、友人達の期待に可能な限り応えたいと、本音で考えております。

話は変わりますが、1987年の夏、3ヶ月間中国で過ごし、北京・西安・上海・蘭州等の街々で大衆の熱気・活力を感じ「あなた方の国中国は、これから20～30年できっとすごく成長するよ！」と答えたことがあります。あの時も中国の友人達が、僅か30年ほどで見事に戦後復興を成し遂げた日本の凄さを礼賛し、自分達の国に仰ったのに対して、私は率直に印象を述べたに過ぎません。ただそれが解放前の中国でしたから、俄には信じてはもらうことも叶わず、社交辞令半分くらいの受け取り方をされていたのかも知れません。それでも21世紀に入って10年、私のかつての印象は現

実のものとなりましたし、中国は今や押しも押されもせぬ世界第2位の経済大国となっております。

さてエジプト・カイロやアレキサンドリアで街々から感じる熱気、活力、1988年の中国を彷彿とさせるものが確かにあります。だから、いずれきっとこの国も成長するだろう、との期待感は頑なに持っております。それに私なりに応援しているのですから、成長してくれなくては困ります。少なくともE-JUSTだけでも、しっかりとした大学になって頂かなくては、定年退職後の最後の御奉公にと、老骨に鞭打つ身には、鞭の打ち甲斐が無いのです。

とは申せ、なにごとも一朝一夕にはいかぬものです。とりわけエジプトの友人達は、熱気を感じさせる反面、中国の方々と比べてねちっこさがいささか稀薄であります。これは、イスラム教という宗教からくるある種の「諦観」が、彼らの心の底に流れているからかも知れません。何と言っても「イッシャーアラ（神が許したまうなら）」が慣用句・常套句で、日常茶飯事使われているお国であります。

「明日会いましょう！」の呼びかけに、返事が「イッシャーアラ」なのです。これが中国なら「ミンテンチェン（明天見）」ですから、そもそもの心がけが違うと思えてならないときもあります。

もう一つ判りやすい例を紹介したいと思います。これは一度既に紹介済みかも知れませんが・・・。

彼らは定刻を違えることを、一向に苦にしないのです。講義開始時刻朝9時なのに、平気で20分、30分と遅れてきます。そしてその言い訳（excuse）が「車が混んでいて。いつもなら30分の道を、一時間もかかった。」と、平然としているのです。いつもなら30分というのは、日中の非ラッシュ時の事で、朝のラッシュ時なら1時間かかることは余程のことが無い限り、自明に近いというのに何という事でしょう。

「それでは、講義開始時刻に遅れるのは当たり前でしょう。」との非難は、馬耳東風なのです。

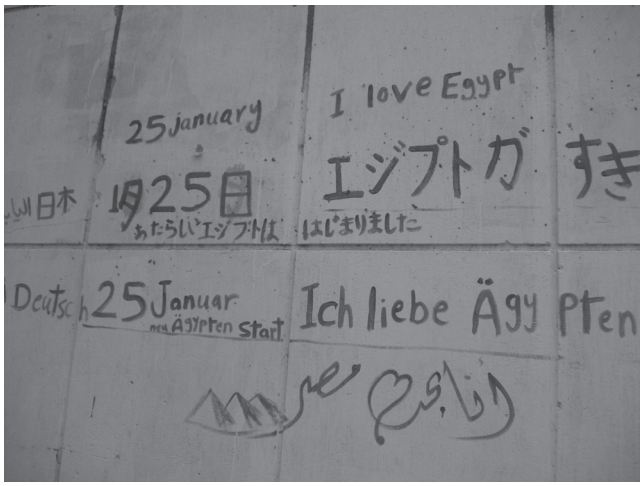
以上のような経験を何度もして、私は学生諸君に「日本人の時刻で、講義を開始する。」と、明言するようにしております。これくらいではエジプト人達の時間感覚は変わらないでしょうが、小さいことからコツコツとやっていくしかありません。それも十年後にエジプトを背負って立つであろうE-JUSTの若者達が変えることができましたら、それが最初の一歩になるだろうと考えることにしております。

最後になりましたが、革命のなったエジプトを感じさせる写真を最後に紹介して、アレキサンドリアからの手紙を完結させたいと思います。

長い間のご愛読、有難うございました。

（通信　昭和48年卒　50年修士　53年博士）

革命の際放火にあったエジプト政府建屋



壁の落書き